

臨床ソーシャルワークの概念の再検討

— 仏教の「愛別離苦」を手がかりに —

米 村 美 奈^{*}

言葉は、時代とともに変化する。西洋語を翻訳した学術用語もその概念も、新研究の成果や時代に応じて変容する。概念の変容に伴い学術用語が刷新されるともいえる。すなわち日本化である。筆者が専門とする臨床ソーシャルワークにおいても例外ではない。

本稿では、日本文化の骨格を構成する仏教の、特に「愛別離苦」の原意と日本化の変遷を手掛かりに、出会いと別れを考察する。そのうえで「臨床」の語源の根底にあるキリスト教文化を再確認し、諸概念のもつ文化の相似と相違を検討し、学術用語の語源と翻訳語の日本化で生じる概念のズレに注目して、臨床ソーシャルワークの概念を再検討する。

キーワード：臨床ソーシャルワーク、愛別離苦、出会い、別れ、概念

1. 研究目的

「臨床ソーシャルワーク (clinical social work)」の概念については、1984年に全米ソーシャルワーク協会 (NASW) 理事会が承認した定義があり、坂野憲司はこの全米ソーシャルワーク協会の定義を軸にしながら日本の現状を押さえて一歩進め、「個別の対象（個人，集団，地域社会を含む）とそれらの環境との交互作用に焦点を当て、多様で常に変化する交互作用のあり方に参加し共にあるソーシャルワーク実践」を臨床ソーシャルワークと定義している（坂野・柳澤編2005：9-13）。筆者はこうした定義を援用しつつ、人間関係学を基礎に個人や社会の関係性に着目したソーシャルワークを「臨床ソーシャルワーク」と考える。

筆者は先に「臨床ソーシャルワークにおける『態度としての臨床』の一考察—「無財の七施」を手掛かりに」の論考で、仏教を貫く教えの一つである「無財の七施」を取り上げ、比較・考察した（米村2022：1-14）。本稿はその続篇に当たり、筆者の「臨床ソーシャルワークにおける『態度としての臨床』を「仏教の代表的な教え」とを比較・考察する研究を続けるものである。本稿の研究目的を大きく整理すると以下の2点である。

^{*} 淑徳大学大学院総合福祉研究科 総合福祉学部教授

第1点は、論考のタイトルに示すように、仏教の基本的な教えの一つである「愛別離苦^{あいべつりく}」を取り上げ、「別れ」とその始まりである「出会い」を主要テーマに、臨床ソーシャルワークの基本である「態度としての臨床」にとって、仏教の教えである「愛別離苦^{あいべつりく}」が基礎概念となり得るのかを考察するための概念の押さえ方を考察する。

仏教の教えにおいては、八つの苦しみ（四苦八苦）にどう向き合うのかをテーマとする。一方、ソーシャルワークも人々の生活上の苦しみにどう対応するのがテーマである。同じ苦しみに対しても仏教とソーシャルワークの対応方法は、異なるが目指す目的は、同様である。そうした時に臨床ソーシャルワークが課題とする「態度としての臨床」として、「愛別離苦^{あいべつりく}」をどのように援助関係において理解するのかの概念整理を行っていく。

第2点は、筆者が専門とする「臨床社会福祉（臨床ソーシャルワーク）」の「臨床」「社会」「福祉」という学術用語が、いずれも明治以降の翻訳語であることを再確認し、その学術用語のもつ概念の根底にキリスト教文化があることの意味を再検討する。検討する西洋キリスト教文化のもとに成立した学術用語の「語源」と、「翻訳語＝日本語」のもつニュアンスの相違を確認した上で、日本の現状に相応した理解を深めるために、日本文化の骨格を構成している仏教の教えと比較・考察する。そこで、臨床ソーシャルワークそのものの概念化を進める基盤として成り立つ可能性を探る。その方法として、筆者が本稿を論究するに至った契機的一端を示す。

以上の2点が本稿の主要な研究目的であるが、内容が複合的なものであるために整然と順を追っての論述とならない点を、あらかじめお断りすることをご理解いただきたい。

2. 臨床ソーシャルワークの概念の整理

(1) 仏教における関係的存在

私たちは、この世に一人で存在するのではなく、人とのかかわりのなかで生きている関係的存在である。他の人とのかかわりが生じたときが「出会い」であり、人とのかかわりが終わるときに「別れ」が訪れる。私たちにとって最初の出会いは、一般的に言えば、この世に誕生した瞬間の「父・母と子」の親子関係から始まるといえよう。

一方、仏教の伝統的な教えでは受胎したときが生命の始まり、すなわち人と人の「出会い」としている¹⁾。その教えにしたがえば、胎児のときから「関係的存在」が始まるといえる。仏教伝来が近來の研究成果のごとく538年とすれば²⁾（末木1996：19）、今日まで1400年余の長きにわたって日本人が有してきた文化であるともいえよう。もちろん、仏教伝来と同時に日本人全体が仏教徒になった訳ではない。

「良いとこ取りの複合化」が日本文化の特徴と言われるが、受容後に仏教や儒教などの外来文化が徐々に日本古來の文化と習合し、日本独自の文化とそれを表現する言葉が形成されていったと

考えられる。換言すれば、儒教に代表される中国文化も、インド文化を根源とする仏教も、共に相応の日本化がなされることで、日本文化の骨格となったといえよう。その結果、今日のタイやミャンマーをはじめとする「仏教」と、日本の諸宗派に代表される「仏教」とは大きく異なる宗教となっている点を注目すべきである。

そうした流れのなかで、仏教や儒教の教えにつながる具体的な例の一つが「数え年年齢³⁾」と数え年を基準とする数々の通過儀礼等である。仏教の教えは、「胎児のときから関係的存在が始まる」と捉えるあり方と関連すると考えるため、本具体例を押さえておきたい。

「数え年年齢」は誕生した段階で1歳となり、毎年正月を迎えるごとに1歳を加算していく。古来、中国を中心に東アジア諸国で採用されてきた長い歴史を持つ文化である。その名残は現在でも仏教の各宗派共通の法事に見られる。本稿の主要テーマの一つである「別れ」のなかでも、「最期の別れ＝死別＝臨終」に関する事例である。3回忌法要は丸2年目の命日に営まれるのが通例である。「数え年年齢」と同じく、死亡直後の法要を1回目と数え、丸2年目の忌日が3回目となる。その後の7回忌も13回忌も、各宗祖の誕生・開宗・入滅などの記念法要も同様の数え方が踏襲されている。

また人生の通過儀礼の一つとして、全国の著名寺院を中心に人気を集めているのが「^{やくどし}厄年」である。厄年の数え方は地方によって異なるが、原則的に数え年年齢が基準である（岡田・阿久根1993：280）。さらに、645年に初めて公的に採用された「^{たいか}大化」から連綿と続く年号⁴⁾も、同じ考え方に基づく。そのため大化元年は大化1年を意味し大化^{ぜろ}0年は存在しない。同じく平成0年も令和0年もない。そしてこの文化からは、「^{ぜろ}0歳児」の概念は発生しない。しかし仏教や数え年年齢では、胎児は既に^{ぜろ}0ではなく、関係的存在として始まっていることを表しているといえる。

他方、私たちが現在用いているのは、生まれた段階が0歳で誕生日ごとに1歳ずつ増えていく満年齢である。長く続いた数え年年齢から、満年齢に変更されたのは1950年（昭和25）である⁵⁾。満年齢や0歳児の概念はこののち一般化していく。1400年余の長い数え年年齢の文化にくらべれば、わずかに70年余の歴史であるが、今日ではごく当たり前となっている。

(2) 概念化の重要性

ここで筆者が強調したいのは、1) 現時点で当たり前となっている各分野の学術用語・概念を表記する「ことば」も、その背景に固有の文化が無視できないほど厳然とあり、2) 歴史をたどれば多様な変遷をしていること、3) そして現時点で用いられている諸概念も変化していく可能性を含んでいること、4) それゆえにこれまで用いられてきた概念を整理し、5) 時代に合わせ新たな言語化をする必要性がある点である。

なぜなら、学校教育を考える上で学術用語のもつ役割は極めて重要だからである。日本の教育についての原則を定めた法律「教育基本法」の教育の目標（2条）では5つの目標を掲げ、その

第1で「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情操と道徳心を培うとともに、健やかな身体を養うこと」を示している。この幅広い知識や教養、豊かな情操、道徳心、職業に関する技能、さまざまな規範などの学習、特に高等教育における学習や研究の多くは、学術用語を用いて行われ、学術用語の意味する概念を正確に理解することが必須となる。

渡辺利夫（経済学者）は「論理とは概念の積み上げである。概念は長い歴史的時間の中で先学の知的営為により磨かれてきたものである」（『読売新聞』2001.1.13）と述べている。先学の知的営為により磨かれてきた専門用語を正確に理解し、各学問分野の研究テーマを論理化（言語化）することが高等教育のもつ役割と考える。

(3)「出会い」と「別れ」

「愛別離苦^{あいべつりく}」を臨床ソーシャルワークの概念化に重要な「人の関係的存在」に戻すと、鷺田清一は「誕生してからかなり長い期間、保護者に世話してもらわないと生きていけないのは人間だけ。また人間だけが、年少者が年長者をこれまた長期間にわたって面倒をみる」（鷺田2015：215）と指摘している。人は生まれながらにしてさまざまな関係性のなかで生きているのである。より厳密に言えば、私たちは「人とのかわりのなかで生きている関係的存在」であるとともに、「人間は誰しも、一人では生きていない」ということである。

この「人間は誰しも、一人では生きていない」という点については早坂泰次郎、そして足立頼の研究がある。また、野澤正子は「乳幼児の対人関係」と題する論考で、一人では生きていない存在の典型と考えられる胎児・赤ん坊とその母親とが、出産に先立つ胎児のときから身体的ならず精神的にも強い絆で結ばれ、濃厚な関係性を有していることを次のように記述している。

「母親は、受精卵の子宮内への着床の瞬間から自らの身体が、続いて精神が変化していくことを体験し、自分と異なるもう一人の人間をわが身に迎えることの厄介さを引き受ける決意と覚悟をもち、やがて胎動の始まりに胎児の成長を感じて心をゆすられ、胎児と対話しつつ出産の日を待つ。胎児もまた、胎内で母親の声を聞き心臓の音や血流の動きで母親の呼吸のリズムや烈しいあるいは穏やかな時に高ぶる喜怒哀楽の感情の動きを感じ取り、母親の気質や情緒のパターンを体験する。こうして出産した赤ん坊は想像以上に母親を知っているものであり、その母親による世話や抱っこは子宮内の環境の延長上にありそれゆえ存在の連続性を保障するのである。」（野澤2006：83）

この世に誕生したのち、幼児は成長するにつれて、さまざまな出会いと別れを繰り返し、関係的存在として多様で重層的な関係性を築いていく。そのなかには自ら選択した積極的な「出会い」もあれば、受動的で消極的な「出会い」もある。演劇や映画などでは演目に基づく台本（脚本）が用意され、登場人物は主役も脇役もそれぞれの役割や台詞^{せりふ}が決められている。一人二役の場合もあるかもしれないが、基本的に主役は一人である。

しかし、私たちの人生では、一人ひとりが人生の主人公であり、同時に幾つもの脇役の役割を

担っている。親子関係も親に対しては子どもであり、子どもに対しては親である。兄弟姉妹がいる場合には、相互に兄・弟・姉・妹の立場に立つ。こうして家庭・学校・職場・地域交流などの社会活動のなかで、さまざまな関係的存在として生きていき、保育所・幼稚園の入園や卒園、学校への入学や卒業など、数々の出会いと別れを繰り返していく。

すべての関係性が消滅するのは、死を迎えたときで、これが最終的な「別れ・臨終」である。その間にあって関係性は常に変化し、しかも一方的な変容ではなく、交互作用のもとに共に変化していく。仏教にあっては中世以来、臨終を迎えんとする人に対しての「死の迎え方と看取りのあり方」「看病する側の五つの心得」など、臨終行儀りんじゅうぎょうぎが伝えられてきた。(長谷川2021: 181~191)

(4)「出会い」と「別れ」の先行研究

早坂は、共に変化していく関係的存在の視点から「出会い」を多角的に探求し、『「出会い」と encounter という言葉のもつ違いの深層』についての論究など、優れた研究成果を残している。

佐藤俊一は、早坂の研究を継承しながら、関係的存在としての人間理解を「生きるとは人とのかわりの中で人間になる歩み」と示し(足立2015: ii)、関係的存在のあり方について「幼児は母親をはじめとして重要な大人との関係で成長する、あるいは言葉を獲得する。こうした事実は、幼児が自己として確立する以前に、関係を生きていること、つまり関係が先にあって私が生まれることを示している」と指摘している(佐藤2015: 23)。佐藤の「関係が先にあって私が生まれる」という指摘と野澤の論考「乳幼児の対人関係」を合わせ考え、先述した伝統的な仏教の「胎児のときから関係的存在が始まる」という教えと比較するとき、大変興味深いものを感じる。佐藤はさらに「別れ」についての考察を発表している。(佐藤2019: 1~3)

本稿では「出会い」と「別れ」に関する先行研究に導かれながら、臨床ソーシャルワークの援助者のあり方に着目して、別れに関する仏教の愛別離苦を取り上げ比較・検討する。

3. 仏教の教え「愛別離苦」

(1)「愛別離苦」の出典

仏教の教え「愛別離苦」あいべつりくは仏教を貫く教えである。仏教では人生で誰もが経験する苦しみを四苦八苦くはっくに分類し、その教説のなかで愛別離苦を説く。愛する者と別れる苦しみを示す平易な教えのため、釈迦以来、仏教の教えが説かれるさまざまな場面で説かれ、別離の悲しみに遭遇した人の心を癒してきた。

四苦八苦を説く經典は、初期大乘仏教の『法華経』譬喻品(『大正新脩大藏経』第9巻13頁上)などがあるが、ここでは大乘仏教の經典である北涼天竺三藏曇無讖ほくりょうてんじくさんぞうどんむせん訳『大般涅槃経』だいぱんねはんきょう卷第12(聖行品)の漢訳原文と読み下し文を示す。

原文「復次善男子。八相名苦。所謂生苦老苦病苦死苦愛別離苦怨憎会苦求不得 苦五蘊盛苦」
 (『大正新脩大藏經』第12卷435頁上)

読み下し文「また次に善男子。八相を苦と名づく。いわゆる、生苦・老苦・病苦・死苦・愛別離・苦怨憎会・苦求不得苦・五蘊盛苦なり。」

仏教にはさまざまな教えを説く膨大な経典が残されている。涅槃経は釈迦の入滅をメインテーマとする経典群の総称で、初期仏教でも大乘仏教でも数種の涅槃経典が説かれている。大乘仏教の『大般涅槃経』はすべての人々に成仏の可能性があると説く「一切衆生悉有仏性」を説くお経として、中国・日本の仏教に多大な影響を与えた。

(2)「四苦八苦」の意味

次に仏教で説く「四苦八苦」の内容を検討する。中村元『広説佛教語辞典』では「①人生の苦悩の根本原因である生・老・病・死を四苦といい、これに愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦の四苦を加えて八苦という」として、八苦を以下のように説明している。

- 1) 生苦…生まれることの苦しみ。
- 2) 老苦…老いゆくことの苦しみ。
- 3) 病苦…病にかかる苦しみ。
- 4) 死苦…死ぬことの苦しみ。
- 5) 愛別離苦…愛する者と離れる苦しみ。
- 6) 怨憎会苦…この世の中では恨み憎む者とも会わなければならない苦しみ。
- 7) 求不得苦…欲して求めてもなかなか物事を得ることのできない苦しみ。
- 8) 五陰盛苦…五蘊盛苦・五取蘊苦ともいい、人間の身心を形成する5つの要素(五陰・五蘊、すなわち色・受・想・行・識)から生ずる苦しみが盛んに起こることをいう。(中村2001; 640)。生苦には、輪廻転生し再び生まれる苦しみの意が含まれている。

『岩波 仏教辞典』では四苦八苦を解説したあとに、「後世になると四苦八苦は、人間界のすべての苦ということから、この上ない苦しみ、言語に絶する苦を意味するようになった。なお四苦八苦の解説は、六道苦を説いて離苦得脱を勧める六道釈で特に重視され、『往生要集』を起点として、特に浄土門の唱導(筆者注:一定の法式によって行う説法)において敷衍され練り上げられてきた」(岩波1989: 346)としている。

(3)「愛別離苦」の本来の意味

次に愛別離苦について一般的な辞典の『広辞苑』では「親・兄弟・妻子など愛する者と生別・死別する悲しみ。八苦の一つ」とし、『新明解故事ことわざ辞典』では「愛する人と生き別れたり死に別れたりする苦しみ。この世の定めで、仏教でいう八苦のひとつ」(三省堂編集所2001: 3)

としている。いずれも愛する人との「生別の苦しみ」と「死別の苦しみ」を並列して取り上げている。他の一般的辞典類や四字熟語の解説書も同様である。

しかしパーリ語やサンスクリット語の語源の解説に重点を置く、仏教語辞典では異なる解説が示される。水野弘元著『パーリ語辞典』(二訂版)では、「愛」を表す「piya」の項で經典のパーリ語を引用し、「piyehi vippayogo dukkho 愛する人々との別離は苦である。愛別離苦」(水野1981: 194)としている。中村元『広説佛教語辞典』も「愛別離苦」の項で「愛する者と別れるという苦しみ。四苦八苦の一つ。Priya-viprayoga-duḥkha」(中村2001: 5)とシンプルな解説をしている。2つの代表的な仏教語辞典をみる限り、愛別離苦の原意は「愛する人々との別離は苦である」と確認できよう。愛別離苦を説く經文の根底にあるのは釈迦以来の仏教、ひいてはインド文化の伝統である。外界の現象も個々人の内的な心理も、人間関係における対人関係も、すべての関係性が縁起の理法にもとづいて生起するという文化であり、別れが発生する原因を「縁起=変化」ととらえている。

仏教のことわざを解説した勝崎裕彦著『仏教ことわざ辞典』では、愛別離苦を「別れ=変化」の視点から平易に次のように解説している。「この世には、愛するものといずれは離れ別れるという苦しみがある。会った人にはいつかはかならず別れ去るという苦しみがある。この世ははかない、そして悲しい。会いたいが縁によって、人と人が会い、言葉を交わし、心を結ぶ。親子の情、夫婦の情、家族の情、愛情、友情、慕情といったように、その時々的心持ちを起こし、情けを結び、よしみを交わす。しかし、この世はせつなくむなしい。そうした人と人のつながりも、いずれは別れ別れ、やがては離れ離れになっていく。それが運命というものである。」(勝崎1992: 19) 勝崎の解説に見られる特徴は、別れる辛さ、苦しみに先立つ出会いが示されている点である。まさに、人はこの世に一人で存在するのではなく、人とのかかわりのなかで生きている関係的存在であり、他の人とのかかわりが生じたときが「出会い」であり、人とのかかわりが終わるときに「別れ」が訪れる視点に立っての解説である。

これまでの考察で、仏教經典に示される愛別離苦の本来の意味は、シンプルに別れの苦しさを示す教えであり、死別を特に含むものではないことが確認できる。

原意が確認できたところで胎児のときから「関係的存在」が始まる仏教の教えから愛別離苦を捉えたと、死ぬ瞬間まで苦しみが続くことがわかる。そして、臨床ソーシャルワークを考える時に愛別離苦の苦しみから逃れられないためにその事実を受け止める支援が展開されることが確認できる。

(4)「愛別離苦」の意味の日本化

では、仏教經典の愛別離苦の内容がどのような経緯で変化し、「生別の苦しみ」と「死別の苦しみ」を並列し、むしろ「死別の苦しみ」が強調される日本化がなされたのであろうか。

幾つかの理由が考えられる。1つは『岩波 仏教辞典』の解説に見られるように、『往生要集』を起点とする浄土門の隆盛以降、愛する者との死別の悲しさ、辛さ、苦しさを強く意識する内容となったと考えられる。『往生要集』は恵心僧都源信（942～1017）が仏教經典などから、往生（臨終）についての文章を集め、念仏往生を勧めた書で、日本浄土教の理論的基礎となるとともに、日本の文学や芸術などに幅広く影響を与えている。

2つには、平安時代中期の1052年（永承7）に末法が始まるという、末法説が流行したこともあげられ、あわせて、平安時代末から鎌倉時代の初めにかけて、源平争乱、大地震などの天変地異、モンゴル帝国の襲来（元寇）などが発生し、無常の世と称された。この風潮も愛別離苦の内容に死別の解釈を加える要因となったといえよう。

愛別離苦の解釈の日本化を考えると、愛別離苦の類義語に「諸行無常」や「会者定離」があることに注目しなければならない。中村元『広説佛教語辞典』では、諸行無常の項で「諸のつくられたもの（所行）は無常である。万物は常に変転してやむことがないということ。つくられたものは移りゆくということ」（中村2001：915）として、万物は常に変化するもの、移りゆくものとの解説である。会者定離については「会うものは必ず別れ離れるということ」（中村2001：127）とシンプルに説明している。いずれも縁起に基づいて変化する関係性を表す表現である。

4. 学術用語の概念変化

ここで、臨床ソーシャルワークの研究の一環として、筆者が仏教の「愛別離苦」を取り上げて本稿を執筆するに至った契機的一端を略述する。もちろん、以下の契機は順を追って発生したものではない。複合的かつ重層的に喚起されたものである。少し長くなるが著者にとって、臨床ソーシャルワーク研究を仏教の教えと比較・考察することで、より深めるための大きな転換点になるのではないかと自覚の上で、煩を厭わず列記する。

(1) 「出会い」の原語 encounter（英語）の語源

仏教の愛別離苦における別れを取り上げる前に人との出会いについて、押さえておきたい。まず1つ目は、早坂泰次郎著『人間関係学序説』で確認する。早坂は日本語の「出会い」とその原語 encounter（英語）のもつ違いの深層を論究し、encounterの語源であるラテン語 contra に驚くほどの多義がある点に注目する。「出会い」のほかに「反対に」「対抗して」などの語義のあとに「敵に」という限定がつけられており、「日本語の『出会い』とは逆に、緊張したきびしい語感を認めないわけにはいかない」と指摘している（早坂1991：128～129）。また「日本人の自己が西欧人の自己とは本来的に異なっているという見解を提起する」（早坂1991：144）など、鋭い論究を展開している。

さらに興味深いのはsocialの翻訳語・社会と、それに先行して用いられた「世間・世の中」を対比である。「おそらく社会学者たちを含めて、日本の人びとは家庭での内輪の団らんの中で社会ということばはあまり口にしないと断言してもよい。そうした私的場面では世間、あるいは世の中という語が社会という語にとってかわる。」(早坂1991: 149)しかし今日の視点に見れば、30年以上前の早坂の指摘とは反対に、研究者はもちろんのこと社会一般においても、家庭内の会話でも、「世間・世の中」よりも「社会」が違和感なく多用されている。このことが「臨床」という用語の語義の変遷を考察するうえで参考になる視点である。

(2) インフォームド・コンセント Informed Consentの訳語を引いた検証

2つ目は、中村雄二郎著『臨床の知とは何か』である。中村は同書の「VI 生命倫理と臨床の知」で、脳死に関する論述を展開した末尾に「説明と同意の問題」を取り上げ、インフォームド・コンセント Informed Consentの訳語に関する見解を次のように述べている。「〈説明と同意〉というのは、アメリカの生命倫理とくに医療の領域で大きく取り上げられるようになった〈インフォームド・コンセント〉を意識して日本語に置き換えたものである。なぜ原語をそのままつかわないのか、また、もっと直訳して使わないのか、という疑問あるいは抵抗感をもたれる向きもあると思うので、最初にその点について述べておこう。

原語をそのまま使うことに賛成しかねるのは、まず、その場合にどうしても、アメリカでの概念枠のなかに問題を閉じ込めることになりがちだからである。(中略) また、もし〈インフォームド・コンセント〉そのものを直訳すれば、〈十分な説明を受けた上での同意〉とか、〈知らされた上での同意〉とか、いう訳語が得られるが、これでは英語(あるいは米語)でいうときの直截さはなくなる。あるいはもっと短く、〈納得同意〉と訳す案もあるが、こんどは、医者^{あい}と患者との相対^{たい}の関係が表わされない。そこで、その相対^{たい}の関係を第一に示すために、もともとの意味とは少しずれても、日本語として自然な〈説明と同意〉を採ったのである。」(中村1992: 195~196)

中村はさらに、Informed Consentをどうして「説明と同意」と訳したかを次のように補足説明している。「同じような問題でも、国や社会が違い、文化が違えば、多かれ少なかれずれが生まれ差異が生じるのは、ことばの翻訳だけにかぎらない。問題そのものの主要な論点、つまり、どこに重要な問題があるかということも、必ずしも国や文化によって同じではない。とくに、この〈説明と同意〉あるいは〈インフォームド・コンセント〉の問題は、文字どおり医療における医者^{あい}と患者の具体的でなまなましい人間関係にかかわるので、そのことがいっそう著しい。(たとえば、アメリカではインフォームド・コンセントが、もともとの趣旨とむしろ反対に、かえって頻発する患者の医療過誤訴訟に対する医者側の防波堤に使われていることなどは、人々の権利意識の在り様をはじめとする国情の違いをつよく感じざるをえない。)」(中村1992: 196~197)

中村が強く主張しているのは、アメリカのInformed Consentと日本語訳の「説明と同意」に含

意される差異の根底に、文化の違い、国情の相違が厳然とあるとの指摘である。先に早坂が指摘している「encounter（英語）」と日本語の「出会い」との語感の違いも、その背景に文化の相違があることは同じである。一方で、中村が訳語にこだわり、そのよりよき伝達に尽力した貴重な姿勢に大きくうなずきながら、現代では「社会」の用例がはるかに「世の中・世間」を上まわっているように、翻訳語「説明と同意」よりもカタカナ表記の「インフォームド・コンセント」が市民権を得ているという、時代の趨勢を感じるのである。

(3) 概念化（言語化）の変化の実相 ―日本語での高等教育の意味

3つ目は、中国文学研究者・加藤徹の『日中二千年 漢字とのつきあい』である。加藤は訪日した英米人が驚くことの一つとして、日本人教師が教壇に立ち「日本語による高等教育」をしている教育風景を指摘し、さらに英米人が驚く理由を次のように述べている。

「日本では、幼稚園から大学院まで、すべての教育を日本語で受けられる。この事実も、外国人を驚かせます。アジア・アフリカには、高等教育は現地語でなく英語やフランス語で行う、という国が、いまでも珍しくありません。日常生活を送るには現地語だけで間に合うが、現地語には科学や西洋近代哲学の概念をあらわす単語がないため西洋語で授業せざるをえない、という国は、案外多いのです。」（加藤2007：69）

加藤は日本語による高等教育を可能とした背景を、幕末から明治初期にかけて西周^{にしあまね}（1829～1897）や福沢諭吉（1834～1901）などの教育者・哲学者・啓蒙家たちが、西欧各国に留学して西洋近代の思想や学問を学び、日本に紹介するためわかりやすい翻訳語（新漢語）の考案に尽力した点を指摘する。しかし当時の政府首脳は日本の実情を冷静に見て、日本語だけで近代的な高等教育を行うのは不可能と考え、欧米から多数のお雇い外国人を招聘し、アメリカ人ウィリアム・S・クラーク博士は自然科学一般を英語で講義し、ドイツ人エルヴィン・F・ベルツ博士は医学をドイツ語で教えるなど、英語・ドイツ語・フランス語等の講義が行われていたことを紹介している。

次に、明治後期にはそれ以前の日本には存在しなかった「文明」「文化」「自由」「権利」「義務」「個人」「近代」「存在」など、新たな概念をあらわす諸分野の学術用語の体系的な翻訳が進み、先進の西洋文化を学んだ日本人教師がお雇い外国人に代わって旧制高校や大学等の高等教育の教壇に立ち、翻訳語（新漢語）を含む日本語で講義するのが当たり前となり、現代まで継承されているとする。（加藤2007：68～70）

今日にあっては、一部外国人教師による授業も行われ、あるいは英語のみの教育を建学の特徴に掲げる教育機関もあり、さらに2020年度から小学校の英語教育が始まっている。しかし基本的には日本人教師による「日本語による高等教育」が行われている。筆者は専門とする臨床社会福祉の「臨床」「社会」「福祉」のすべてが明治以降の翻訳語であり、当然ながら西欧で発祥し展開されてきた概念であることを、感慨をもって再確認した。

(4) 西洋の先進的学問の根幹とキリスト教

4つ目は、保坂幸博著『日本の自然崇拜、西洋のアニミズム～宗教と文明／非西洋的な宗教理解への誘い』である。宗教学者・保坂は一般的な宗教への理解を次のように記す。「宗教は、私たちのアイデンティティを構成する根本的な要素であると言われます。(略)けれども、この言い方は、私たち日本人にとって、まことに厄介な代物です。何故かという、私たちは、『あなたの宗教は何か』と問われても、とっさに返答できない人がほとんどだからです」(保坂2003：1)。続けて保坂は、こうした質問をする人たちの背景を明解に解説している。

『あなたの宗教は何か』と、人を困らせる質問をこちらに浴びせてくるその人は、いったい誰なのでしょう。それは、実は、ヘブライズムの伝統を強固に保持している人々、とりわけキリスト教を文明の中核に持つ人々です。すなわち、今日世界中で圧倒的な優勢を誇っている西洋文明、それが私たちにその質問を投げかけるのです。西洋文明は、キリスト教という土台を欠いては存立し得ません。キリスト教は彼らの骨組みであり肉であり、しかもその体内に脈々と流れる血液です。」(保坂2003：2)

わが国が明治維新以来、追いつけ追い越せと必死に学んできた西洋の先進的学問の根幹はまさしくキリスト教を土台とした成果である。また、宗教 (religion) や信仰 (belief) などの翻訳語も、それにともなう概念も、明治に誕生したものであることに気づく。保坂はさらに学問一般についても、その根底にキリスト教があることを次のように指摘している。

「今日世界中の先進工業国や、これに追いつきたいと努力している他のすべての国々において、国民が身につけるべき教養として国家が推進している学問のほとんどは、西洋キリスト教文明圏で成立した諸学問に他なりません。(略)我が国において、これらの学問研究に従事している専門家たちが、ある一定のレベルにまで研究が進んだ際に、口を揃えて言う言葉があります。それは、『自分の学問は、一見したところキリスト教とは何の関わりもないように見える。しかし、突き詰めてゆくと、この学問は、その背後に、あるいはその土台の根深いところに、キリスト教を持っている。それゆえ、この学問を真に究めようとすれば、キリスト教の理解が必要不可欠となる』というものです。」(保坂2003：50)

こうした鋭い指摘から改めて、日本の戦後に展開されたソーシャルワークに抱く違和感を整理し、仏教の教えにソーシャルワークを照らして考えてみる必要性が再確認できる。

(5) 岩井祐彦の「態度としての臨床」のあり方への着目

5つ目は、臨床ソーシャルワークの「臨床 (的) (英語, clinical)」の語源 (ギリシャ語, klinikos) とその解釈も、キリスト教を土台にしたものであることの再確認である。

岩井祐彦は「立教大学社会福祉ニュース」(創刊号「発刊のことば」)に、「臨床的Clinicalとは、ヨーロッパ中世における聖職者の独自の役割を意味した。病者の身体的苦悶が終りに近づき死に

臨むことが認められた時、全き孤独の不安におののく精神を創造者たる神との出会いと導く営みである。このように臨床的とは、人間に対する全的配慮の態度を示すことばである。」(岩井1968: 1)と原意を記している。

このたび、岩井の文章とその前文を読み返した。前文は以下の通りである。

「ペン大(筆者注: ペンシルバニア大学社会事業大学院)における研修を終り、北欧・英国を巡り、社会事業教育と研究機関を視察し、特に二つのINSTITUTEに強烈な印象をうけた。一つはオランダのINSTITUTE FOR SOCIAL STUDIESで、人間福祉の実現という視点にたって諸社会科学を動員し、総合的な地域開発の理論と実際を追及しているもので、旧来の社会福祉の概念を大幅に変容させる実践活動をしている。他は英国のTAVISTOCK INSTITUTEであって、精神分析者を中心とする諸専門家によるチームによって、人間殊に家族福祉の研究に従事している。その充実したクリニックでの徹底した臨床的接近の成果は、英国全体の地域福祉活動の支えとなっている。又両者は実に充実した専門職養成のプログラムをもつ。

共通に見られることは、視点を『人間の福祉』におき、片時もそこから目を離さない禁欲的態度であり、方法として総合的臨床的であること。総合的であることについては特に説明を要しないが、臨床的ということについては説明を要する」(岩井1968: 1)

前文を再読すると、岩井がアメリカ研修を終えて、オランダと英国を視察し、特にTAVISTOCK INSTITUTEでの徹底した臨床的接近の成果や、2つのINSTITUTEに共通する「片時もそこから目を離さない禁欲的な態度」と「方法として総合的臨床的であること」に強烈な印象を受け、その上で「臨床的 Clinical とは…」の説明が記された経緯が分かる。岩井はこのことばを発表した4年後の1971年に逝去している。筆者は本稿執筆中に、早坂が「立教大学社会福祉ニュース」(第4号)に「岩井さんを悼む」を記していることを確認した。早坂が「1972年1月1日早朝しるす」と記した追悼文は以下のように書かれていた。

「巻頭のことばを私が書かなければならなくなったこと、それが追悼のことばであることは何とも残念である。(略) 岩井さんの真情に触れた人ならば誰もが知る通り、彼の生涯は配慮そのものであった。岩井さんがいるところ、いつでも、どこにでも配慮があった。(略) 1971年11月3日に、医科歯科大の病室を訪ねたとき、もはや言葉が自由でない状態だったにもかかわらず、ちょうど来合わせておられた夫人に、向いの病室の患者さんが今朝から痛みがひどいそうで気の毒だ、と一生懸命に話していた岩井さんがまぶたに焼きついている。そこにもやっぱり配慮があった。……」(早坂1972: 1)

筆者は早坂の岩井への友情あふれる追悼文を読みながら、岩井が強い決意をもって「臨床的 Clinical とは…」ということばを記した覚悟に似た思いと、その全人的配慮を最後まで実践する生き方、さらにオランダや英国で見聞した「片時もそこから目を離さない禁欲的な態度」と「方法として総合的臨床的であること」を、自らの死の床にあってもなお「他の患者を気遣い」必死に実践していた姿に「態度としての臨床」の意味深さがわかる。

(6) 学術用語・概念の日本化と、一神教の「最期の別れ」

6つ目は、水谷周著『絶対主の覚知と誓約～イスラームのこころと日本』である。浄土宗の寺院に生まれた水谷は、敬虔なムスリム（「神に帰依した者」の意）として、多くのイスラーム関係の書を著述している。世界宗教のなかで、世界中でそして日本で信者数を最も伸長しているのがイスラームである。水谷は別の著書『宗教信仰復興と現代社会』のなかで「現在の信徒数は20～25億人近くになろうとしています。統計上では、あと30年後にキリスト教徒を追い抜くのではないかとわれています」（水谷2022：15）と指摘している。「酒を飲まない」「豚肉を食べない」など、イスラームの戒律への知識と理解が高まるにつれて、日本国内でもハラール（イスラーム法で許されたもの）認証を取得したレストランや大学食堂が話題となっている。

水谷は『絶対主の覚知と誓約～イスラームのこころと日本』のなかで、「イスラームの和風化」と題して宗教や思想が異なる地（日本）に伝わるためには、相応の変化が必要で、あれほど厳格で知られるイスラームも和風化する予兆を下記のように記している。

「あらゆる宗教や思想は、異なる土地においてさまざまな影響を受けて、土着化し変容するものである。（略）イスラームが日本において広まる過程において、それがなじみやすく文化全体の中で軟着陸するために、相応の日本化を経ることとなるのだろう。」（水谷2021：194）

筆者は、思想や宗教が異なる地に軟着陸するためには相応の変容を経る必要があるとする水谷の指摘に、大きな関心と共感を持つ。それは「臨床ソーシャルワーク」もまた同様の道筋をたどっていると思うからである。

さらに水谷は「日本語の語彙の不足」の項で、「イスラームを内と外から見る問題でより具象的な課題として、使用される日本語の術語の問題がある。日本語はアラビア語ではないので、慈悲、あるいは禁欲や聖地などの術語には日本の文化的な脈絡が背負わされているという問題である」と問題提起し、具体的な術語例として慈悲と正義を取り上げ、「慈悲」については、『慈悲』という言葉を知らない人（筆者注：日本人）はいないだろうが、イスラームのそれは絶対主であるアッラーのみが発揮しうる働きであるという認識はまずないのが普通である」とし、「正義」については、『正義』も同様である。イスラームの正義概念は、本来アッラーから見てあるべき状態が正義であると規定され、認識される。（略）日本語の正義とはいわば勧善懲悪的な、あるいは喧嘩両成敗的な感覚のものであるとすれば、それとは相当異なっている。基準が人間ではなく、アッラーという絶対的スタンダードに照らして判断されるものだからである」と、日本語の意味とイスラーム本来の意味とのニュアンスの相違を鋭く指摘している。（水谷2021：228～229）

先述した早坂や中村の例のように、筆者は「臨床（的）clinical」や「社会福祉social work」も、水谷の指摘と同様に、理解の相違が生じていることを感じる。それゆえに、常に新たな言語化や概念の検討と工夫の発信が必要と痛感し、それが学問の発達に寄与すると考える。

(7) 最後の「別れ」のとらえ方

水谷は「臨終」についても、イスラームでは看取りという用語さえ見当たらないと、イスラーム文化の「最期の別れ」の様相を次のように簡潔に記している。

「昨今日本では、看取りがしきりに話題を呼ぶテーマとなっている。(略) イスラームでは、看取りという用語さえ見当たらない。それは一般的な、介護の一部として捉えることも可能だろうが、そのような位置づけがされているわけでもない。要するに看取りを検討する余地もなければ、その必要性も語られないということである。その理由はこれも簡単明瞭で、アッラーに帰されるのが人間の死の意味であるから、看取る方も看取られる方も、それ以上に色々思案する必要がないということである。具体的に言えば、双方が声を合わせてクルアーンを読誦すれば、それだけで何も過不足ないという状態である。」(水谷2021: 32~33)

水谷の「アッラーに帰されるのが人間の死の意味であるから、看取る方も看取られる方も、それ以上に色々思案する必要がない」や、看取る方と看取られる方が一緒にイスラームの聖典『クルアーン』を読誦して死を迎える描写に、一神教の文化の象徴がみえる。

他方、長谷川匡俊著『仏教福祉の考察と未来～仏教の死生観』から仏教の死に対する福祉を確認する。長谷川は研究者としての自らの立脚点を「一貫して、仏教の視点から福祉を考えようとしてきた。それは筆者の研究領域がもともと日本史学をベースに、日本の仏教史や社会福祉の歴史を学び、そこから、仏教と福祉に橋を架ける『仏教(社会)福祉』という分野に実践的な関心を持ってきたからである」(長谷川2021: 12)としている。

3部構成の「Ⅰ 仏教と福祉の結合」「Ⅱ 仏教福祉の思想と実践」では、「仏教と福祉の結合から見えてくるもの」(長谷川2021: 13-24)や、「仏教と共生の福祉」(長谷川2021: 25-39)など示唆に富む論述を展開している。筆者がもっとも注目したのは「Ⅲ 「死」の福祉」であり、なかでも仏教の伝統的な臨終行儀を取り上げ、人生の最期(末後)の別れである死の迎え方と、その看取り方の心得と作法を考察している点である。特に可円の『臨終用心』に示される「看病についての五つの掟」の大胆な現代的解釈にうなずくものが多い。加えて、仏教の宗派を超えての死に行く者への作法「息^{いき}合わせ」を次のように記している。

「なお一つふれておきたい臨終の作法がある。宗派を超えて諸書に散見される『息合わせ』に関してである。病人に死がいよいよ間近かに迫ってきたとき、看取る者が病人の呼吸に合わせて念仏なり題目なりを唱える作法をいう。母親の胸に抱かれた乳飲み子は、その母の胸の鼓動—原体験的リズム—に大いなる安堵を感じ、すやすやと眠りにつくものだが、こうした脈搏や呼吸は生命現象を支える基礎的営みであるだけに、教学上の説明をしばらく措くとしても、この『息合わせ』は格別大切な作法ではあるまいか。」(長谷川2021: 188-189)

先述したように、人とかかわりのなかで生きている関係的存在である私たちの最初の「出会い」を、仏教の教えでは受胎したときとしている。長谷川のいう仏教の「息合わせ」による「最

期の別れ」は、野澤の論考で示した胎児と母親との身体的・精神的関係の強さと、驚くほど呼応している。前述の水谷が紹介するイスラームの「最期の別れ」に見られる光景と比較するとき、各文化の相似と相違の諸相が確認できる。

5. 考察

本稿では、仏教の「愛別離苦」を手掛かりに、「臨床」を始めとする学術用語・概念の、原意と翻訳語の微妙なズレと変遷等を論究してきた。その考察をまとめると以下の通りである。

- (1) ソーシャルワークは、クライアントの生活課題に対して支援を行っている。生活課題が起こる根底には、仏教の八つの苦しみ（四苦八苦）の1つである「愛別離苦（愛するものと別れる苦しさ）」を、クライアントが感じることで支援のニーズが生じてくる。私たちは、人とのかかわりのなかで「出会い」と「別れ」を繰り返す関係的存在であり、仏教では胎児のときから関係的存在が始まる。これらを数え年年齢や法要の回忌の数え方を例に挙げて明示した。
- (2) 仏教の「愛別離苦」は、「四苦八苦」の教えの1つであり、原意は単に「愛するものの別れは苦しい」であったが、日本では次第に「生き別れと死に別れを合わせた苦しみ」に変化した。臨床ソーシャルワークにおいて、この別れの捉え方が「態度としての臨床」を示すときに大切な概念となる。本稿では、この捉え方の変遷を日本化として確認した。こうした捉え方をもとに西洋生まれの臨床ソーシャルワークにおける支援の在り方を再検討し、現在のわが国でのソーシャルワークにおける影響を明らかにすることが今後の課題となろう。
- (3) 加藤徹の指摘をもとに、「臨床」「社会」「福祉」を始めとする各分野の学術用語・概念の多くが明治以降の翻訳語であり、それゆえに、日本では幼稚園から大学院まで、すべての教育を日本語で受けられることを示した。日本文化の形成に重要な役割を果たしているこうした言語が、臨床ソーシャルワークの実践に大きな影響を及ぼすことが推測できる。
- (4) 西洋発祥の概念の語源に注目し、その根底にキリスト教文化があることを再確認して、早坂泰次郎が「出会い（日本語）」と原語 encounter（英語）のもつ違いを論究し、encounter の語源であるラテン語 contra に驚くほどの多義があり、「出会い」のほかに「反対に」「対抗して」などの意に必ず「敵に」という限定がつけられており、「日本語の『出会い』とは逆に、緊張したきびしい語感を認めないわけにはいかない」との指摘を確認した。
- (5) また早坂は social の翻訳語「社会」と先行して用いられてきた「世間・世の中」を対比した。今日的視点では30年以上前の早坂の指摘とは反対に、研究者・社会一般・家庭内でも、「世間・世の中」より「社会」が用いられている点を論究した。
- (6) 中村雄二郎がインフォームド・コンセント Informed Consent を「説明と同意」と意識した経緯を確認し、中村も Informed Consent の原意と意識語の「説明と同意」との差異を危惧

している点を確認した。

- (7) 岩井祐彦が臨床ソーシャルワークの「臨床（的）（英語，clinical）」の語源（ギリシャ語，*klinikos*）の解釈を記した全文を再読し，また早坂の岩井への追悼文により，岩井が強い決意をもって「臨床的 Clinical とは…」と記した覚悟に似た思いと，自らの死の床にあってもなお「他の患者を気遣い」必死にその全人的配慮を実践していた姿を確認し，「態度としての臨床」の意味深さを論究した。態度としての臨床は，誰が他者とどのように生きるかを意味するものであるが，別れの時まで表現できることがわかる。
- (8) 水谷周がイスラームの立場から「慈悲」と「正義」を例に上げて，根底となる文化の相違に基づく「概念の和風化」の問題点を提起していることを取り上げた。西洋生まれの臨床ソーシャルワークの概念化を行う時に大いに概念の和風化を意識すべきことが理解できる。
- (9) 「最期の別れ」の様相について，水谷の「イスラームでは，看取りという用語さえ見当たらない」という文化と，長谷川匡俊の「仏教の死に対する福祉」を対比し，仏教の死を看取る『息合わせ』が格別に大切な作法であるとの指摘を確認した。
- (10) 結論的に，現時点で当たり前となっている学術用語・概念も，多様な変遷をしていること，それゆえに時代に合わせた新たな言語化が必要であることを提起した。臨床ソーシャルワークも西洋生まれであるが日本育ちとして，新たな言語化のあり方の方向性を確認することができた。

注

- 1) 仏教では人間誕生を生死流転の視点から捉え，生命の尊厳と胎児の仏性を説く（『大宝積経』『俱舍論』等参照）。
- 2) 日本への仏教伝来説は従来の552年説と，新たな研究成果による538年説があり，末木文美士をはじめとして，近年では538年説が支持されている。
- 3) 数え年の仕組みは歴史的に見ると，日本だけでなく，中国を中心に東アジア諸国で広く用いられてきた。そのため歴史上の人物の活躍年齢等も，書籍の執筆年代によって表記の年齢が変化している。校祖輪島聞声が淑徳女学校を開校した年齢も，一般に40歳で開校とされるが40歳は数え年年齢である。筆者は『図解 輪島聞声』や『輪島聞声の生涯』の年譜では数え年齢と満年齢を並記した。
- 4) 645年6月19日に「天皇・皇太子，群臣を集めて新政府に忠誠を誓わせ，また初めて元号を立て，大化元年とする」（日置英剛編『新・国史大年表』第1巻，2007年，国書刊行会，127頁）。
- 5) 1949年（昭和24）5月24日公布の法律第96号「年齢のとなえ方に関する法律」であり，1950年（昭和25）1月1日に施行された。

文献

- 足立穀編『臨床社会福祉学の展開』学文社 2015
- 岩井祐彦「刊行のことば」(「立教大学社会福祉ニュース」創刊号) 立教大学社会福祉研究所 1968
- 岡田芳朗・阿久根末忠編『現代こよみ読み解き事典』柏書房 1993
- 勝崎裕彦『仏教ことわざ辞典 愛蔵版』溪水社 1992
- 加藤 徹「日中二千年漢字のつきあい」NHK出版 2007
- 坂野憲司／柳澤孝主編『臨床ソーシャルワーク事例集 精神保健福祉援助演習』弘文堂 2005
- 佐藤俊一「人間関係の現象学～対象化への視点～」(足立穀編『臨床社会福祉学の展開』学文社 2015
- 佐藤俊一「別れ～生を確かなものにする」(『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』(第26号) 淑徳大学大学院総合福祉研究科 2019
- 三省堂編集所『新明解故事ことわざ辞典』三省堂 2001
- 末木文美士『日本仏教史』新潮文庫, 新潮社 1996
- 中村 元『広説佛教語辞典』東京書籍株式会社 2001
- 中村元, 他『岩波 仏教辞典』岩波書店 1989
- 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書, 岩波書店 1992
- 野澤正子「乳幼児の対人関係」(『現代のエスプリ No468 対人関係の再発見』至文堂 2006
- 長谷川匡俊『仏教福祉の考察と未来～仏教の死生観』国書刊行会 2021
- 早坂泰次郎「岩井さんを悼む」(「立教大学社会福祉ニュース」第4号) 立教大学社会福祉所 1972
- 早坂泰次郎『人間関係学序説～現象学的社会心理学の展開』川島書店 1991
- 保坂幸博『日本の自然崇拜, 西洋のアニミズム～宗教と文明／非西洋的な宗教理解への誘い』新評論 2003
- 水谷 周『絶対主の覚知と誓約～イスラームのこころと日本』国書刊行会 2021
- 水谷 周『宗教信仰復興と現代社会』(『宗教信仰復興叢書』1) 国書刊行会 2022
- 水野弘元『パーリ語辞典』〈二訂版〉春秋社 1981
- 米村美奈「臨床ソーシャルワークにおける『態度としての臨床』の一考察～「無財の七施」を手掛かりに」(『2021年度総合福祉研究』第26号), 淑徳大学社会福祉研究所総合福祉研究室 2022
- 鷺田清一『「聴く」ことの力～臨床哲学試論』ちくま学芸文庫 筑摩書房 2015
- 渡辺利夫「抽象論の多用避け, 個性的な社説期待」(『読売新聞』メディア時評, 2001.1.13) 読売新聞社 2001

Revisiting the Concept of Clinical Social Work: Taking a cue from Buddhism's love, separation, and suffering

Mina YONEMURA

Words change with the times.

Both the academic terminology translated from Western languages and the concepts transform with results of new research and new eras.

Academic terminology is continuously being renewed as the concept are transforming.

In other words, Japanification. Clinical social work, in which I specialize, is no exception.

This study examines encounters and partings from multiple perspectives, taking as its starting point the original meaning of the Buddhist concept of “love, separation, and suffering,” which constitutes the backbone of Japanese culture. I investigate the evolution of this concept's Japanification.

The study then reexamines the concept of clinical social work by reconfirming the Christian culture underlying the etymology of the word “clinical,” focusing on the cultural similarities and differences underlying various concepts and noting the conceptual gaps that arise in the etymology of academic terms and the Japanification of translated terminology.

Keywords: Clinical social work, Love, separation, and suffering, Encounter, Separation, Concept